

3) 移植方法

田植機を株間30cm (11.1株/m²) に調節し、4 ~ 5 本/株を目安に移植を行う。その場合、苗箱数は約10枚/10aとなる。

苗の植え付け姿勢は直立 (90°) から多少傾く (60°) までは問題ない。欠株が多少あっても収量低下にはならないが、欠株部位に雑草が発生することがある。

なお、11.1株/m² (株間30cm) に移植するには、疎植対応田植機が必要になる。しかし、従来の田植機でも13.9株/m² (株間24cm) 程度までの疎植栽培が可能である。

表5 疎植対応田植機での移植精度 (調査日:2003年6月9日)

試験区			植付け姿勢 (%)			欠株率 (%)	植付け本数 (本/株)	平均株間 (cm)
栽植密度 (株/m ²)	縦送り量 (mm)	作業速度 (m/s)	90° ~ 60°	60° ~ 30°	30° ~ 0°			
11.1	11	1.1	99.2	0	0	0.8	4.4	30.6
18.5	11	1.1	99.8	0.2	0	0	4.7	18.6

注1) 催芽もみ180g播き

注2) 各条100株調査

注3) 田植機はI社製PQ4 (乗用4条、偏芯ギヤを改良)

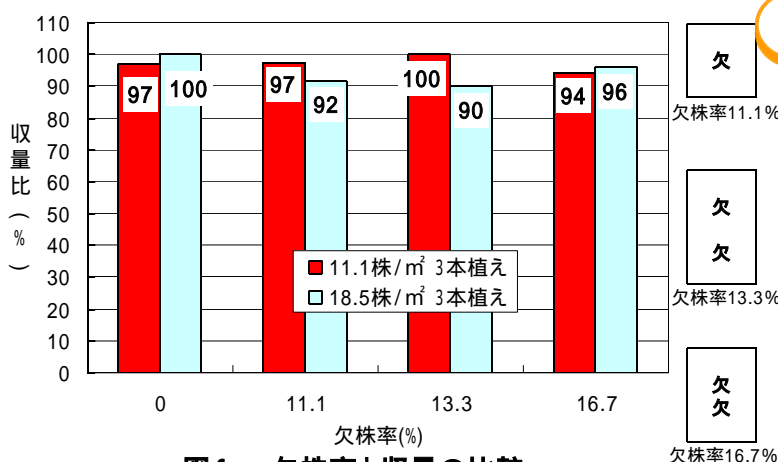


図6 欠株率と収量の比較

注) 欠株0%の18.5株/m²区の収量を100とした

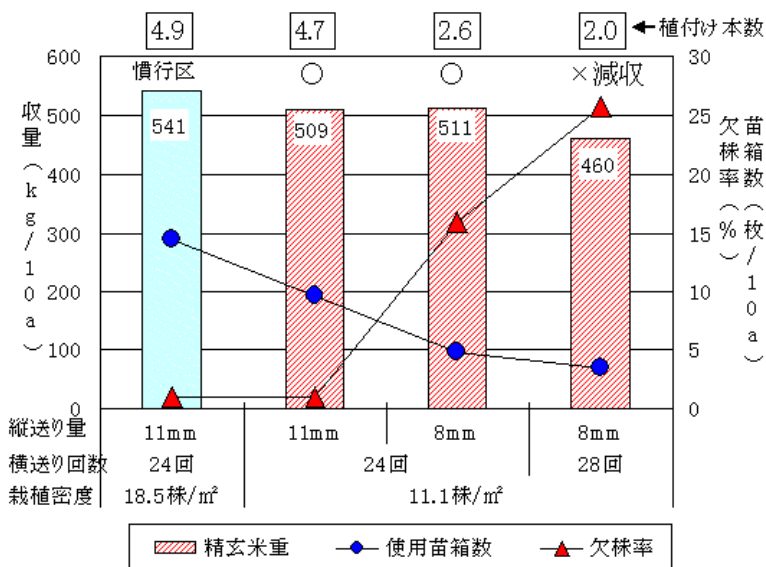


図7 苗かき取り量を減らした場合の欠株と収量

(2003年ヒノヒカリ、田植機I社製PG63)

移植精度は良好。

欠株率11.1%

欠株率13.3%

欠株率16.7%

欠株があっても、周りの株が補償する。

縦送りと横送りの関係は、8ページ「図 田植機の横送り回数と縦送り量の設定方法」を参照